

月田秀子の昨日、今日、明日・・・

ヨーロッパを襲っている大寒波で、52年ぶりにリスボンに雪が降ったとのニュースが1月30日舞い込んで来た。

12月19日の大阪でのコンサートを終え21日から1月9日までリスボンへ行って来た。天気には恵まれ、雨は降っても、ほんの一時、30分後には、信じられない程の青空がレンガ色の屋根の上に広がる。気温は、日中は20度近くまで上がり、坂道を昇ったり降りたりするうちに汗ばんでくるほど。それでも夜になると、気温は10度をわり、ぐっと冷え込んでくる。東京でいうと、四月上旬の気温だろうか。トイレもシャワーも共同の安宿で、バスタブにお湯を張って冷えた身体を温められないので、ヒーターの上に乗せて暖をとるしかない。

今回の旅の目的は、日本で一緒にライブ活動をしてくれる「ポルトガルギタリスト」を捜すことだった。

昨年9月、ニューアルバム「夜のファド」の録音が終わった頃、5年近く私を支えてきてくれたポルトガルギターの「上川保氏」から「辞めたい」との意思表示を受けた。「本来のギタリストとしての原点に戻り、ギタリストとして、今後は活動してゆきたい」という彼の意思は固く、私としても、彼の生き方を拘束することなどできようもないことを半ば諦めの中で悟った。大阪でのコンサートを終え、私はリスボンに向かった。

リスボンへ向かう飛行機の中で、ファドを歌い始めた頃から今日までのことを思い出した。20年前、ポルトガルの友人フェルナンドからポルトガルギターが送られてきた。それを抱えて大阪中の楽器屋さんを、弾く人を求めて歩き回ったこと。初めてポルトガルギターに挑戦してくれたY氏のこと。そして彼が去って行った日のこと。その後、4人のギタリストが私を支えてきてくれた。半ば強引にファドの世界に引き込んだと言ったほうが正しいだろう。私にとっては、ポルトガルギターなしのファドは考えられなかった。彼らがいなければ、今日までファドを歌ってこられたのだと。

リスボンに着いたのはいつものように真夜中近く、20日足らずの滞りの間に、はたしてギタリストを見つけられるだろうか？眠れぬまま、朝を迎えた。

窓を開けると、アルファマの家並みの向こうに、朝焼けに染まるテジョ河が見えた。5年ほど常宿にしているが、こんなに素晴らしい眺めの部屋は初めてだった。チェックインする時は、ウェルカムドリンクと称してポルトワインを2杯も頂いたし、「きつといいことがある！」太陽がすっかり昇る頃には、不安は、いつものまにか夜の闇と共に消えていた。



現地で活躍している何人かのポルトガルギタリストとの交渉の結果、定期的なライブ活動は不可能に近いことがわかった。20年近く続けてきた「巴里野郎」をはじめ関西でのライブは中止せざるを得ない。

コンサートツアーを固めて企画さえすれば、来日してくれるギタリストはいらぬ、ということだけが、今の私の一縷の望みにつながっている。

幸い、東京は、ポルトガルギターなしで、ギターの蓮見氏が引き続き「マヌエル」でのライブをサポートしてくれるという。彼の力を借りながら、新しい活動の方法を模索してゆこうと思っている。形は変わっても、ファドを歌うのが私の「運命＝ファド」であることには変わりはないのだから。

リスボンでの年越し

クリスマス、大晦日、新年の休みを過ごす為、イタリア、イギリス、フランス、ドイツなどヨーロッパ各地からの観光客が多く、市電でも、街中

でも様々な言語が飛び交っていた。もちろん、ファドのお店も殆どが観光客、歌い手もこれでもかと思うほどの「接待ぶり」。「サウダーデ」もあったものではない。それだけ「ファド」がポルトガルの観光資源になっている事実、異国人の私が口をはさむことでもないと思いつつ、今回、足を運んだファドのお店は、延べで20回ほどでしかなかった。

宿の斜め向かいにあるファドの店「CLUBE DE FADO」の入り口にあるバーで、ギタリストのレロにバッタリ会った。又、タクシードライバーをしているとのことで、ファドを聴きに来たイギリス人観光客を待っているところだった。以前会った時は、ギタリストとして来ていたのに、気のせいかもしれないとぼつぼつ悪そうだった。「ここは、造幣局と呼ばれているんだ」彼はそっと耳打ちした。なるほど、60人は入るだろう店内は観光客でいつも溢れ返っている。それでも、演奏が始まると、水を打ったように店内は静まり返る。というか、静かにならないと演奏を始めない。オーナーであり、ポルトガルギタリストのマリオ・パシエコの一貫した方針が、従業員にも徹底している。歌い手も、人気絶好調のジョアナ・アメントエイラをはじめ、若手の歌手に混じって、往年のアルシンド・デ・カルヴァリョ等が、かなり質の高いファドを聴かせてくれる。今回は、一度だけ、トリで歌わせてもらった。

大晦日、リスボン郊外にあるギター製作工房から、オスカル・カルドーゾが、「CLUBE DE FADO」にやって来た。コメルシオ広場の年越しカウントダウンのイベントでござったがえす中、やっとたどり着いたという。「ヒデコ、浮かない顔してるね」と尋ねる彼に、「ギタリストが見つからなくて困っている」と言う。「大丈夫だよ。僕は沢山ギタリストを知っている。必ず、見つけてあげるから。まあ、ぼくが弾ければ喜んで日本へ飛んでいくんだけど。だから、そんな悲しい顔はしないで。ほら、心配事はもうどっかへ飛んでいっちゃったのだろ」と、いつものひょうきんに満ちた真顔で慰めてくれた。妻に去られ、3人の子持ちのシングルファザーは、「日本にお嫁さんを探しに行かなきゃ」というのが口癖だ。日本の女性は献身的だと信じ込んでいるらしい。

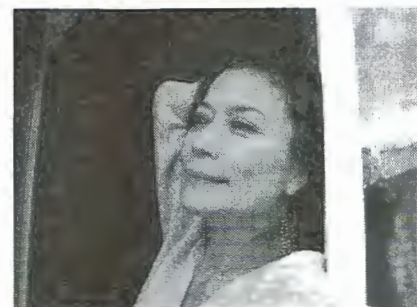
カウントダウンの人ごみの中に繰り出す気にもなれず、宿の裏窓から、打ち上げられる花火を一人で眺めながら新年を迎えた。コメルシオ広場の喧騒に混じって、12時になると、停泊中の船がいっせいに汽笛を鳴らした。静かな日本での除夜の鐘を懐かしく思った。

アマリアの墓参り

元旦は、サンタ・エングラシア教会に眠るアマリア・ロドリゲスの墓参りに行ったのだが、休館日。翌日も月曜で休館日。3日に出直すことにした。帰路降り出した雨をやり過ごす為に入ったバーで、ポルトとモスカテルを飲む。

3日は、アマリアの歌を録音したミニディスクを持って、花で飾られた冷たい大理石の棺の前で、1時間ほど彼女のファドを聴いた。いつものまにかアマリアと一緒にいるような気分になっていた。前よりもずっと近くに。「ポルトガル語で歌う私のファドを、ヒデコは日本語で歌いなさい。私が死んでも、あなたが歌っている限り私の歌はこの世に生き続けられるのね」歌うことがたどろろとつぎえている証しだったアマリア。そう言った貴女が、歌うこともなく忘れられ、取り残されてゆく寂しさの中で、「貴女は、私から全てを奪ってゆく」そんな意外な一言がアマリアの口から洩れた時の悲しさが思い起こされた。そして、その誤解を解くこともできずに、別れた日のことを。

アマリアから奪うのではなく、私は、アマリアのファドを、人間のやり場のない孤独を歌うあなたの心を、それでも生きてゆく命のかけがえのなさを感じるからこそ、そんな孤独な魂に向かって歌ってゆこうとしている。いままでぼんやりとしか見えなかった自分の姿が見えてきた。



ポルトガルギタリスト探訪記

●パティオ・サンタナにて

リスボンに着いて翌日、「パティオ・サンタナ」というファドの店に行った。

NHKの「一本の道」でもお世話になった、現地ツアーコーディネーターとして活躍している堀女史、CDショップ「アマリア」のマヌエル・シモンイシュ氏の紹介で、そこでポルトガルギターを弾いているアントニオ・パレイラ氏に会うためである。確か、10年程前、改装前のお化け屋敷のような店構えの頃、一度行ったことがある。私の後ろのテーブルで、テレザ・タウロウカがご主人とぶつぶつ口論しながら食事をしていて、10時近くになって、店内が、にわかに賑わってきた。ギタリストのことは全く覚えていないのだが、請われるままに3曲ほど歌ったことがある。

その日は、かつての賑わいはなく、ファディスタも、若い女性2人、それとかなりしっかりした歌いっぶりの男性のファディスタ、客は私の友人6人と他に4人の客だけだった。パレイラ氏も他のギタリスト達も浮かぬ顔つきで、「のり」はいまいちのまま、お開きになった。

●ア・ニニ (A NINI)

友人のアントニオが、待ってましたとばかり「もう一件行こう」と連れて行ってくれた店は、50~60人はいただろう、熱気むんむん、次から次へと歌い手が登場する。毎週木曜日にファド好きの集まるレストラン (FADO VADIO) だった。歌い手は、殆どが男性だった。みなそれぞれ深味のある渋いファドを聴かせてくれる。聴衆はその歌声に聴き入っている。気に入ったファドを聴いた後は必ず、アントニオは親指を立てて、目くばせをしてきた。私も親指を立てて頷いた。2月にアルファマのファドの店を徘徊している時に、出会ったアルトゥールが、壁に寄りかかりながら聞いている私に気がつき、びっくりした面持ちで抱きしめに来てくれた。とても、抑制の取れた声で気持ち良さそうに歌っていた。かたわらで、ポルトガルギターが何とも繊細で濁りのない心地よい音を奏でていた。「歌い手が、ギタリストや、観客に、“歌わされる”というの、まさにこのことなんだ」と思った。そのギタリストが、わざわざ挨拶をしに来てくれた。顔と音には記憶があるのだが、名前が思い出せない。何ともサウダーデに満ち満ちた空気、その中に溶け込んでゆく自分があると同時に、この国、この街に生まれなかったことの悔しさがあふれ出てくる。お店を出たのは3時を回っていた。アントニオが、ぴかぴかのベンツで送ってくれた。飲酒運転、おまけに免許証は財布と共に行方不明だった。翌日になって、財布が見つかったとの電話に胸をなでおろした。

●ジョアンJoaoとの再会

アルファマの「ESQUINA DE ALFAMA (アルファマの街角)」という店に行った。店中に飾られたクリスマスの赤と青の豆電球が、ファドのライブが始まってもちかちかと灯っている、客のざわめきは一向におさまらない中、吠えるように歌うファディスタは、3年程前、アルファマの店を回りながら歌っていた見覚えのある顔だった。現在、彼がオーナーだという。ファドが好きだということは伝わるのだが、いわゆる「ALMA(魂)」が伝わってこない。通りすがりの一回きりの観光客でもっているのではないかと思うほどの雑然とした雰囲気になんて耐え切れずに、アマルギーニャを一杯だけ飲んで、店を出ようとすると、「ヒデオ」と呼ぶ声がある。そこでポルトガルギターを弾いていたのは、10年程前、アルファマの「Dragao de Alfama (アルファマの龍)」という店で会ったジョアンだった。確か、その頃は、カルロス・ゴンサルヴェスにポルトガルギターを習っていると言っていた。すでにかつての青年の面立ちは失われていたのがつかない。決して上手いとは言えないが、ポルトガルギターをいとおしむように背を丸め抱きかかえて弾く姿には、とても好感が持てた。

日本に来てポルトガルギターを弾いてくれるギタリストを捜している旨を伝え、店を出た。カウンターの中にいたイヴォンヌが、挨拶に出てきてくれた。今日は歌わないという。その後、一度だけ、外から「かもめ」を歌う彼女の歌声を聴いた。相変わらず点滅する豆電球は変わらなかったが、観客は静まり返っていた。内面からほとぼしる哀しみに満ちたその声は、店の外の冷たい風に乗って、薄汚れたアルファマの壁に、暗がりに続く石畳に吸い込まれていくようだった。

ポルトガルギターのジョアンから、「話を詳しく聞きたい」という電話があり、こちらの条件等を伝え、[少し考えさせてくれ]という。とりあえず一度音合わせをすることにした。一時期、彼は、日本の現地企業に勤めていたらしく、ほんの片言の日本語をしゃべれる。日本にもかなりの興味があるようだった。

音合わせの為、リスボンからバスで一時間ほどのマフラ修道院から車で15分ほどの山間の小さな村にある彼の家を訪れた。まるで掘り立て小屋としか言いようのない小さな家で一人暮らしをしている。古材をのこぎりで切り出し、薪ストーブをくべ、昼ご飯の準備を始めた。薪の燃えるにおいと草のおいにおい、胸一杯に吸い込みながら、「都会よりも、やっぱり田舎の方がいいな」と、心とむいいて雑草のおおい茂る庭に佇んでいた。30分もすると、いいにおいがたちこめ、唯一の彼の家族だという黒猫が、戸口で小さく鳴いた。私のお腹の虫も鳴き始めた。

大きな鍋の蓋をとると、なんと「カルデラダ」だ!! ジャガイモ、たまねぎ、パプリカ、にんにく、エイをはじめ何種類かの魚、エビ、ムール貝、あさり、コリアンダーを鍋で煮込んだ私の大好物だ。ストーブのお蔭で、かなり部屋も暖かくなり、掘り立て小屋は、すっかり「家」の相を呈してきた。いつのまにか、赤ワイン、パンまで食卓に乗っている。近所の家から調達してきたと言う。「この村は、店はなくても、何でも揃うのさ」得意げにジョアンは、ワイングラスを掲げながら言った。

美味しい昼食を済ませて、パソコンのデスクトップや、ビデオ、テレビ、廃品としか思えない電化製品が山のように詰まれている谷間で、音合わせを始めた。デスクの上には、懐かしい「ひらがな練習帳」が広がっていた。日系の電気会社に勤めていたときのものなのだろう。彼は、かなり本気に日本行きを考えているようだった。

彼は、ポルトガル語の発声、発音について、歌い方について、かなり直裁に教えてくれた。そのたびに、「気分悪くしたか?」と私に訊くあたり、かなりの苦勞人のようだ。今まで、そんなアドヴァイスをしてくれる人がいなかったのも、私にはとても貴重な勉強になった。

3時から始めて、100曲近くのレパートリーを歌い終えたのは9時近かった。殆ど休憩無し音合わせだった。声は、強靱な声帯のおかげで何とかついていけたが、頭が朦朧となって、歌詞がおぼつかなくなっていた。

マフラからリスボン行きのバスはもうない。日本だったらとくに廃車処分になっているだろう車で送ってくれた。高速道路を車体を震わせながら猛スピードで走る車がいつ分解するのか、怖くて生きた心地がしなかった。ヨーロッパで一番交通事故が多い国と聞いているから尚更だ。

助手席でシートにしがみつき恐怖心に身体をこわばらせている私に気がついて、スピードを落としながら彼は言った。「日本へ行くのはいいが、仕事もなく過ごすのは辛い。僕は、毎日でも仕事がしたい。」お金の問題でなく彼はポルトガルギターを片時も離したくないのだ。それだけの仕事を確保できるだろうか? 私には自信がなかった。

せっかちな性格は演奏にも現れるのだろうか、繊細さに欠けた音には、閉口したことも事実だ。あのような雑然とした店で弾いているせいだろうか? 一戦も二戦も交えることは必至なことのように思えた。それはお互いにとってかなりの苦痛を伴うものだという事は容易に予想される。その苦痛に二人は耐えられるだろうか? ギタリストの蓮見氏との相性もある。いざとなると、問題は山積している。彼には、日本での仕事の見込みがなければ連絡する、と伝えて別れた。「どこか弾ける店にでも行ってみる。」とジョアンはポルトガルギターを携えてアルファ

マの狭い路地に消えていった。

●品性あふれるベルナルド、そして陽気なペドロ

「ヒデコ、ギタリストが見つかったよ。彼の音は本当に美しい響きをしていて、必ずヒデコの力になってくれるよ!」と、弾んだ声のギター作りのオスカルからの電話で、早速、カルモ広場でその青年ベルナルドと落ち合った。27歳という若さだが、どこことなく落ち着いた気品が漂う好青年だ。(弁護士資格も持っている後日オスカルにきいた)大御所のファディスタ、アルジェンティーナ・サントス、シダリア・モレイラ等の伴奏も務めるといふ。もともとギターを弾いていたが、今はポルトガルギター一筋で活躍しているという。彼も、カルロス・ゴンサルヴェスの教え子だ。来日の条件等を告げると、かなり乗り気な様子で、スケジュールの確認までこぎつけた。

というのに!帰国前日に電話があり、話があるという。「練習はどこですか?」と尋ねると、それは話のあとでとのことで、何となく歯切れが悪い。とり急ぎギターを持って蓮見氏共々会うことにした。フィアンセの猛反対にあったと言う。そりゃごもっともであります。1日でも会わずにいられない恋人と、何を好き好んで東洋の果てくんだりまで行って3ヶ月も会わずに暮らさなきゃならぬのさ。返す言葉などありません。

「よくわかった。じゃ、誰か他に来てくれそうないない?」の悲痛な表情を読み取ってくれたのか、5人ほどのギタリストの電話番号を教えてくれた。

「彼なら、かなり自由に動けると思う」というペドロに即電話でアタック。

「今から、そっちへ行く。」とカシュカイシュから車を飛ばしてきた。彼のフットワークの軽さにびっくりしている間もなく、「ともかく、練習しよう」ということで、リスボンの常宿でのリハーサルとなった。幸い宿泊客は他にいないらしく、そのレセプションを使わせてもらう段取りまでペドロはあつという間に取り付けてくれた。髪はぼさぼさ、かなり奔放、そして精力的な青年だった。初めて見るポルトガル人のタイプだった。こういう青年がこれからのポルトガルを変えてゆくのもかもしれない。一曲目の「アルファマ」から始めて、「枷」、舞い上がってしまつてあとは何を歌ったか覚えていない。録音することも忘れていた。見事にすべて完璧な弾きっぷりだった。9時からカシュカイシュでレコーディングの予定だと言うのに、すでに9時を廻っていた。かなりの出来ばえの客のいない「ミニライブ」を終え、満足そうにペドロは、急ぎ又、カシュカイスに帰っていった。

「売れる絵」があるように「売れるギタリスト」と直感した。ギャランティーは、私の手に負える額ではなかった。

●ありがとう、カルロス!

ジョアン、ベルナルドの師、そしてアマリア・ロドリゲスをして、最高のギタリストと言わしめたカルロス・ゴンサルヴェスと会ったのは、リスボンに着いて2日目のことだった。待ち合わせ場所として、カルロスが指定したのはロッシオ広場の「バステラリア・スイサ」だった。リスボンでもお菓子の専門店として有名な店だが、甘いものが苦手な私は、一度も行ったことのない店だ。

ホットチョコレートを一飲み、カップを持った右手の人差し指に、ポルトガルギター用の付け爪はなかった。今日は完全にオフなのだろう。コンサートの時は、朝から爪をつけている。そうすることによって付け爪は、彼自身の爪になってゆくのさ。

彼には、あらかじめCD「夜のファド」と一緒に、今回のリスボン訪問のいきさつを送ってあった。「難しいな…。コンサートツアーとして短期間ならともかく、ライブのために、3ヶ月も滞在となると、ヒデコにとって経済的な負担が大きすぎるよ。」「お金は問題じゃないの。とりあえず3ヶ月間のお金は貯金から出せるわ。それよりも、ファドには、どうしてもポルトガルギターが必要なの。それは同感してくれるでしょう?それと、私はアマリアのように、75歳まで歌うことはできないと思う。せめてあと5年、歌いたいと思っている。そのために一文無しになつても、歌わずにいるよりもずっと幸せだと思つて

る。」「その想いは僕も同じだ。」右手の人差し指を動かしながらカルロスが言った。「それじゃ、カルロス、私がコンサートを企画したら、来てくれる?」「今、スペインでファドを歌っている人がいて、月末はスペインに行くことになっている。夏ころまですでに決まっているので、それ以降だったら…。

ところで、今回のヒデコのCD聴いたけど、チェロは要らないよ。ファドは、ギターとポルトガルギター、シンプルな編成でこそ、歌が生きるのさ。ギタリストはかなりいいね。彼がギターを弾いてくれるのなら、僕一人で日本に行くよ。」「こんな私のために弾いてくれるの?」「ヒデコのファドは70パーセント出来上がってるよ、あと30パーセント足りない分はポルトガルギターさ。今、ポルトガルでは若くて美人のファディスタばかりがもてはやされているけど、彼女達の歌はファドじゃない。その証拠に、心に何も生まれてこない。」「私のポルトガル語の発音がひどくても?」「発音なんか問題じゃないよ。その証拠に、同じポルトガルでも、地方によって発音はかなり違う。VがBになったりもするんだよ。大切なのはALMA(魂)があるかどうかさ。」「マカオでマリーザのコンサートに行った時、最後は全員が熱狂的なスタンディングオーベーションだったわ。」「彼らは、ファドが何かわかってないんだ。ファドはファッションじゃない。心に響くものがなかったらファドなんかじゃない。」かなり今のファド状況には不満がある様子だった。

「難船」というアマリアのファドがあるだろう?日本人ほどあの歌を好きな国民はいない。だからアマリアは日本での公演の時は必ず歌った。今、ファドのセンチメントを理解できるのは日本人しかいないような気がするよ。われわれポルトガル人よりもね。意外な発言だった。

カルロスの携帯が鳴った。どうやら若いブラジル人のご夫人とクリスマスの買い物に行くことになっているらしい。クリスマスを控えて、買い物客でごったがえす店を出て、1月6日、蓮見氏がリスボンに着いた翌日に、「ファド博物館」の講堂で、リハーサルをすることを約束して、カルロスと別れた。カルロスの思いがけない発案だった。そして、それは私の心に久しぶりに射し込んだ一筋の光明でもあった。

リハーサルの時、ソフトケースから出されたカルロスのポルトガルギターは相変わらず汚かった。カルロスは自分の指が動くかどうか気がかりだったようだが、久しぶりに弾くアマリアのファドを、懸命に記憶を取り戻そうとする姿に、身体が震えるような感動を覚えた。リズムの乗りの違いは明らかにあったが、蓮見氏は、確実なテンポでもってカルロスのポルトガルギターを支えていた。日が暮れて薄暗くなった講堂で、明かりをつけることも忘れて、リハーサルは進んでいった。カルロス独特のポルトガルギターの泣かせも健在だった。これこそ本来のポルトガルギターの弾き方なんだと彼は言った。歌ってゆくうちに、私の声も呼び覚まされ、「ヒデコ、やっと調子が出てきたね」とカルロスも嬉しそうに言うてくれた。

夢のようなリハーサルだった。これは、終わりではなく、始まりなのだ、会場を出てゆくカルロスの後姿を見送りながら、自らに言い聞かせた。

その後、帰国前日に、呼び出されて、又、バステラリア・スイサでカルロスと会った。生ビールはやめて、カルロスと同じホット・チョコレート注文した。思ったほど甘くなく、疲れた身体に沁み渡るようだった。日本でのコンサートに彼は協力してくれることになった。アマリア・ロドリゲスとの思い出の深い日本に、最後にもう一度だけ訪れたいと思っているのかもしれない。コンサートのおおよその日取り、ギャランティー等の話を詰めた。アマリア・ロドリゲスの詩に、カルロスが曲をつけた「涙」に、日本語の詩を必ずつけることを約束して別れた。

あとは、会場探しと、動員のために、動くだけだ。

そんなわけで、秋頃を目途に、カルロス・ゴンサルヴェスとのコンサートを開催したいと思っています。どうか、楽しみにしててください。

関西定期ライブ最後の日々

1月25日(水) 京都「巴里野郎」、このシャンソンライブハウスは、1988年、ポルトガルから帰国後、ポルトガルギターの湯浅隆氏とのユニットでファドのライブを始めた店だ。最後のステージは、お客様が2名と言うさびしい状況だったが、そこで出会い、声援を送りつづけてきてくれた人たちの顔をひとりひとり思い出しながら、精一杯感謝の想いで歌った。その日が、最後のファドライブだということは、支配人の平井氏だけに告げた。

26日、「アートクラブ」での151回目のライブは、ノーマイクで歌わせてもらった。最後の歌を歌い終えたとき、私がシャンソンを歌っている頃からのファンの森本、高島両氏が、ステージで「Happy birthday」を歌ってくれ、シャンパンで2日遅れの私の誕生日を祝ってくれた。

27日、「三裕の館」を出る時、ママが泣きながら「又、いつか帰ってきてね。待ってるからね。」と送り出してくれた。

28日、広島「アビエルト」のライブでは、オーナーの中山氏の「是非、生音で」という要望に応じて、ノーマイクで歌った。アンコールでは、「人生よ、ありがとう」を弾き語りでも歌ってステージを降りた。チリの村々を訪ね歩き、貧しさの中でもひたむきに生きる民衆の心を歌いつづけたチリのビオレッタ・パラが、自ら死を選ぶ前年、彼女が48歳の時に作った歌だ。失意の中でも、生きてゆくことの素晴らしさ、人間の尊厳を教えてくれる歌だ。

29日の神戸「あいり」のライブ終了後の歓談の時、「月田さんは、結局、関西を捨てるんだね。」との言葉に「私は決して関西を捨てたわけではありません。東京へ行ってからも、関西でのライブを続けてきました。たとえ、お客様が少なくても、続けるつもりでした。」ちょっとむきになってしまった月田でした。

これらの5日間の日々が「悲しい夢」であってほしいと思った。悲しみを飲み込むためにビールをあおった。私の姿を映す窓の向こうに、大阪の夜景が広がり、あっという間に視界から消えていった。

fados canções

QUE DEUS ME PERDOE

神様 私をお許してください

Silva Tavares
Frederico Valério

作詞 シルヴァ タヴァレス
作曲 フレデリッコ ヴァレリオ
訳詞 カウド ヴェルデ

Se a minha alma fechada
Se pudesse mostrar
O que eu sofro calada
Se pudesse contar
Toda a gente veria
Quanto sou desgraçada
Quanto finjo alegria
E quanto choro a cantar

閉ざしたままの 私の心を
隠さずに さらけ出せるなら
口を噤んだまま 苦しんでいると
打ち明けることができるなら
すべての人はわかってくれることでしょう
私が どれほど惨めであることか
どれほど陽気にふるまっていることか
歌いながら どれほど心で泣いていることか

Que Deus me perdoe
Se é crime ou pecado
Mas eu sou assim
Fugindo ao fado
E fugia de mim

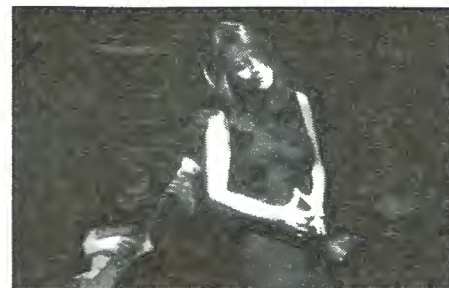
私をお許してください 神様
たとえ罪や過ちであるとしても
私はこのように
ファドへ逃げ込むことで
私自身から逃れてきたのです

Cantando dou brado
E nada me doi
Se é pois um pecado
Ter amor ao fado
Que Deus me perdoe

歌が叫びになるのです
そうすると辛さも薄らいでゆくのです
もし ファドを愛することが
罪であるとしたら
どうか神様 お許してください

Quando canto não penso
No que a vida é de mal
Nem sequer me pertencço
Nem o mal se me dá
Chego a crer na verdade
E a sonhar, sonho imenso
Que tudo é felicidade
E tristeza não há

歌っているときは
人生が苦しいものだと考えずにいられます
我を忘れていられます
不幸がふりかかることもありません
まこと真があると信じることも
夢見ることもできるのです はてしない夢を
すべてが満ち足りていて
悲しみなどどこにもないと



広島「アビエルト」にて

<編集後記>

会報が大幅に遅れて申し訳ありません。心を立て直すのにかなり時間がかかりました。また、一からの出直しです。命も声も健在です。尚一層心に響く歌を歌えるよう精進してゆきます。できることならば、皆様のお声もお聞かせください。歌う場は少なくなりましたが、その声を聞くために、どこにでも飛んでゆこうと思っています。

月田秀子ファド倶楽部ホームページ
<http://www.fado.jp/>

- 月田秀子ファド倶楽部ジャーナル 第48号
- 2006年2月10日発行(季刊:年4回発行)
- 編集・発行「月田秀子ファド倶楽部」事務局
- 〒108-0075 東京都港区港南1-8-27 日新ビル1406号
- TEL&FAX 03-3458-9806

ファンの皆様へお願い

ポルトガルギター、ギターでのライブ、コンサートの夢は、捨てていません。これから、会場探しをしてゆきたく思っています。点が集まり、線になれば、ポルトガルからきてもらえるポルトガルギタリストもいます。集客力にもよりますが50名から300名ほどのキャパのファドに合いそうな会場の情報をお寄せください。もしくは、地元でそのような文化活動を情熱を持ってされている方をご紹介ください。月田自ら出向いて交渉することも考えています。

月田にファドを歌う場を、与えてください！

月田秀子ファド倶楽部 〒108-0075 東京都港区港南1-8-27-1406
TEL/FAX : 03-3458-9806 e-mail : info@fado.jp

<月田秀子のスケジュール>

♪関西での定期ライブは、当分お休みさせていただきます。長い間ご声援くださった皆様に心からお礼を申し上げます。2月出演が決まっている「巴里野郎」「アートクラブ」でのライブは、急遽、ピアノの釈恵一さんが伴奏をしてくれることになりました。彼とは、シャンソンを歌っていた頃以来20年ぶりの顔合わせです。もちろん歌うのはファドです。お楽しみに！

♪3月から、東京「マヌエル」でのライブは、ギター蓮見昭夫氏の協力を得て心新たに再開します。以前にも増してのファンの皆様のご支援ご声援をお願いいたします。

2月22日(水) 京都・四条河原町「巴里野郎」 ピアノ：釈恵一 予約・問合せ：tel / 075-361-3535
ステージ：①20：00 ②21：00 ③22：00 チャージ：3,500円 (入れ替えなし)

23日(木) 大阪市立阿倍野市民学習センター (参加費無料) 申し込み・問合せ：06-6634-7951
“今、あなたに届けたい！ファド～サウダーデという想い”
講演時間：14：00～16：00

♪1月横浜朝日カルチャーセンターでの講演に引き続き2度目のレクチャーへの挑戦です。
申し込み方法は、別紙チラシをご参照ください。

23日(木) 大阪・心斎橋「アートクラブ」 ピアノ：釈恵一 予約・問合せ：tel / 06-6212-2870
ステージ：8：00から3回 (入れ替えなし) チャージ：2,800円

3月6日(月) 東京・渋谷「マヌエル」 *要予約 予約・問合せ：tel / 03-5738-0125
開場：18：00 ライブ：20：30～ (約1時間) 料金：6,000円 (ディナー・ライブチャージ込み)

7日(火) 東京・四谷「マヌエル」 *要予約

8日(水) 「NOITE DE SAUDADE Vol.28」 予約・問合せ：tel / 03-5276-2432
開場：18：00 ①20：30 ②21：30 ③22：30 ライブチャージ：2,500円 (入れ替えなし)

4月3日(月) 東京・渋谷「マヌエル」 *要予約 予約・問合せ：tel / 03-5738-0125
開場：18：00 ライブ：20：30～ (約1時間) 料金：6,000円 (ディナー・ライブチャージ込み)

4日(火) 東京・四谷「マヌエル」 *要予約

5日(水) 「NOITE DE SAUDADE Vol.29」 予約・問合せ：tel / 03-5276-2432
開場：18：00 ①20：30 ②21：30 ③22：30 ライブチャージ：2,500円 (入れ替えなし)

CD「夜のファド」が、CDショップでも お求めいただけるようになりました。

2月10日から店頭販売開始です。店頭がない場合でも、お取寄せ可能です。
録音からご協力いただいているオールエナジーレコード (<http://all-energy.com/>)
を始め、アマゾン等、ネットショッピングにても、お求めいただけます。
東京の銀座の「山野楽器」2階の民族音楽コーナーでは、試聴もできます！

皆様の口コミの力で月田を盛り上げていってくださいますよう
お願いいたします！

